



<氷河消えバルトの海に松島か> 哲風

8月末、持続性科学国際会議に出席のため、久しぶりにストックホルムを訪れました。蒸し風呂のような日本から飛ぶと、涼しい冷蔵庫の中のような北欧の夏です。飛行機から覗くとストックホルム周辺は無数の湖沼と細かい入り江を森林がびっしりと取り囲み、一見、松島のような風景が広がっています。

陸に降り立ってみると、森林の樹々は、硬い露岩の上のわずかな土壌に生えており、ところによっては岩の割れ目などに木の根が張り付いています。樹種はトウヒやアカマツなどいかにも種類が少ないことがわかります。スウェーデンを含むバルト海周辺の北欧地域は、1 万年前まで厚いスカンジナビア氷床に覆われていました。厚い氷の底で削られ、すべすべになった露岩に、直接植生が薄く貼りついたのがこの地域の地表面といえます。後氷期（間氷期）の今でも、気候は冷涼で夏でも気温は 15°C前後、降水量も月数十mm程度、年間でも 500 mm程度の気候であり、植生は破壊されたりすると、回復するのに相当時間がかかります。かつて氷床・氷河に覆われていたヨーロッパ北部での土壌と植生の貧弱さは、どこも共通しているようです。これに比べると、日本を含む湿潤温暖なモンスーンアジアは、夏の気温は 25°C以上、降水量も月 200~300 mm、年間では 1500~2000 mm（以上）もあり、植生は破壊されてもすぐ生えてきます。日本の夏の田畑は雑草との闘いになるわけです。さらに重要なちがいは、200 万年以上続いた氷河時代を通して、モンスーンアジアは高山地域を除き、一度も氷河に覆われなかったため、陸域生態系の歴史は長く、生物多様性もヨーロッパに比べ、比較にならないほど豊かなことです。

ヨーロッパとモンスーンアジアでのこのような気候と生態系の違いは、そのこの住む人たちの「持続可能性」に対する感覚や意識に大きく影響しています。ヨーロッパで生まれた「持続可能性(Sustainability)」という概念は、人が「開発」のため環境や生態系を破壊したり、生物資源を使った場合、どのようにすれば元の環境や資源を次世代の人たちに残せるかという発想から来ています。ヨーロッパでは、一旦壊した自然（生態系）の回復は難しく、長い時間を要するため、「持続可能性」はたゆまぬ努力や叡智で高めていく必要があるわけです。ストックホルムには今回の会議のホストを務めた **Stockholm Resilience Centre** という、地球環境と持続可能性の研究で世界的に有名な研究所がありますが、敢えて”resilience（回復力）”という名前を研究所名につけている意味が分かるような気がします。一方、モンスーンアジアでは、水田や里山などのように、活発な生命活動と水や物質の循環の中で、いかに生態系を利用し調節できるか、ということが「持続可能性」として重要なのです。さてそれでは、砂漠の遊牧民にとっての「持続可能性」とは何か。興味ある問題です。「持続可能性」は、それぞれ異なる歴史や文化をもつ地域で、人と自然との長い時間の関わり合いを通して培われるはずであり、当然、多様であるべきものです。

<名月を田毎に映し幾代かな> 哲風



写真：ストックホルム上空の風景。氷床の消えた跡に、松島のような風景が広がっている。

(2017年8月23日 安成撮影)